

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究 (B)

研究期間：2006～2008

課題番号：18320119

研究課題名 (和文) 東アジア仏教確立期における中国仏教石刻文物の資料的地域的研究

研究課題名 (英文) A Regional Study of Stone Sources (Sutras and Statues) in Chinese Buddhism from the Initial Stage of the Rise of East Asian Buddhism

研究代表者

氣賀澤 保規 (KEGASAWA YASUNORI)

明治大学・文学部・教授

研究者番号：10100918

研究成果の概要：東アジア世界の母体となる中国仏教が確立した6世紀後半、北朝後期から隋初の時期、華北東部一帯に石に刻んだ経典（石経）や石仏が集中的に作られた。末法思想の広まりの中で、仏法を後代に残すために追求された結果がその石刻事業となる。本研究は現地において仏教石刻と遺跡を調査し、関係資料を系統的網羅的に収集整理し、石に刻まれた資料の広汎な存在、当時を知る貴重で多彩な内容が包含される事実を明らかにし、今後の研究の基本情報を提示することができた。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	6,200,000	1,860,000	8,060,000
2007年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2008年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
年度			
年度			
総計	14,000,000	4,200,000	18,200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：東アジア仏教 仏教石経 房山運居寺石経 西安碑林 末法思想 青州仏教石刻 墓誌 安道壺

## 1. 研究開始当初の背景

(1)中国仏教史の上で、6世紀後半は末法思想が広まる中で、仏教が外来性を脱し、民衆に根ざした宗教へと変貌する節目に当たる。東アジア世界の母体となる中国仏教はこの時期を経ることで確立した。

(2)その6世紀後半の北朝後期から隋初の時期、華北東部一帯に石に刻んだ経典（石経）や石仏が集中的に作られた。それは劫火にも耐える石によって、仏法を後世に伝えようとする思いの発露であり、末法思想にたいする一つの答えであった。

(3)この時期の華北東部の仏教石刻を大別すると、山東東部の青州仏教石刻に代表される

近年発見の膨大な石仏群、山東西部から旧鄴城（河北南部）におよぶ仏教石経（大字仏名）遺跡、鄴附近から太行山沿いに北上する仏教石経となる。

(3)しかしこれらの諸事業は、個別の調査・整理・分析などは進んでも、美術史・仏教史・社会史などを併せて、時代の中で総合的に意義を論じられることは少なかった。

(4)また東アジア仏教が成立するこの時期にあって、仏教石刻はそれを具体的に考える材料を提供する可能性をもつ。とくに倭(日本)の遣隋使は現地で直接仏教石刻にふれ、飛鳥仏教美術に何らかの影響を受けたことは十分意識される。しかし従来、東アジア的視座

からこの時期の仏教活動を分析する試みはなかった。

## 2. 研究の目的

- (1)山東東部(泰山の東)地区で近年発見された膨大な仏教石刻(仏像)―大半は6世紀後半の北齊期の作品―を、仏教美術史と歴史学を併せて考察し、その時代的特質と社会的背景を明らかにする。
- (2)山東西部から河北南部にかけて残存する「安道壹」なる人物とそのグループ(?)による石刻大字仏名・経文について、その全容の把握の上、意味と地域性を考察する。
- (3)鄆より北に太行山ぞいに残る石経事業を、その代表をなす宝山靈泉寺石窟、黄山八会寺石窟、房山雲居寺石経を中心に考察を深め、その全体像を具体的に明らかにし、石経事業の時代的特色と意義を浮き彫りにする。
- (4)さらに調査の対象を、山西省地区の仏教石刻と遺跡に向け、その全容と特質把握に努め、河北や山東との比較を通じて、山西の地域性を明らかにする。
- (5)近年、中国全土では経済開発にともない墓誌などの石刻資料の発見があいついでいる。仏教石刻の調査に関連して、南北朝時代から隋唐期の石刻資料の所在状況を系統的に調査し、資料集やウェブサイトなどを通じてその情報を公開し、当該領域の研究に資す。

## 3. 研究の方法

- (1)この研究では現地調査を重視し、関係する仏教遺跡・仏教石刻を主に院生など若手研究者をともなって調べ、あわせて関係資料の把握・入所に努め、また訪問先の文物関係者との意見交換も重視した。調査の過程および終了後の意見交換も大切にしたい。
- (2)先行する太行山東沿い(河北)の調査をふまえ、その西側の山西地区にある主要仏教遺跡と石刻を、北の五台山から太原一帯、東南部の南涅水、羊頭山や青蓮寺などを経て、西南部の運城市や聞喜県などにおいて集中的に調査し、石刻の基本的所在状況を把握した。
- (3)山東地区では、主に東部の青州龍興寺石刻とその周辺の諸城市や臨朐県、博興県などの新出石仏を实地調査することを通じて、地域的特徴と同時代における位置づけも試みた。
- (4)その他、洛陽と西安における石刻資料動向にも注意を払い、学会出席の機会に文物石刻関係の研究者と密接に連絡をとり、資料情報の公開に努めることにした。
- (5)科研メンバーの担当分野を以下のように分け、華北東部の仏教石刻の研究を進めた。  
 氣賀澤：全体の集約と河北北部仏教石経  
 田熊：山東西部・河北南部の仏教石経  
 八木：山東東部の仏教石刻(石仏)  
 西本：華北東部の未法思想と三階教  
 高瀬：山東東部と山西の仏教石刻

## 江川：事務局と唐代石刻

- (6)具体的な研究は個別に進めつつ、定期的に研究会をもち進展状況を確認した。最終年度において科研成果報告会を公開開催し、議論・助言をふまえ成果のまとめに入った。あわせて09年「国際東方学会議」(東方学会)で「山東仏教石刻と東アジア」シンポジウムを開催し、広いレベルで山東仏教石刻の持つ意義を考える機会を設定した。
- (7)この科研費では魏晉南北朝から隋唐時代の石刻資料とその情報を集積し、広く学界に供することを旨とし、明治大学東アジア石刻文物研究所がその仕事を担った。研究所ではホームページを開き、また収集資料の展示を通じ、情報発信に積極的に関わった。

## 4. 研究成果

- (1)房山雲居寺石経の隋唐石経については、『房山石経』所載石経の1点1点の経文・題記のチェックをほぼ終了し、その作成の全体状況を把握することができた。

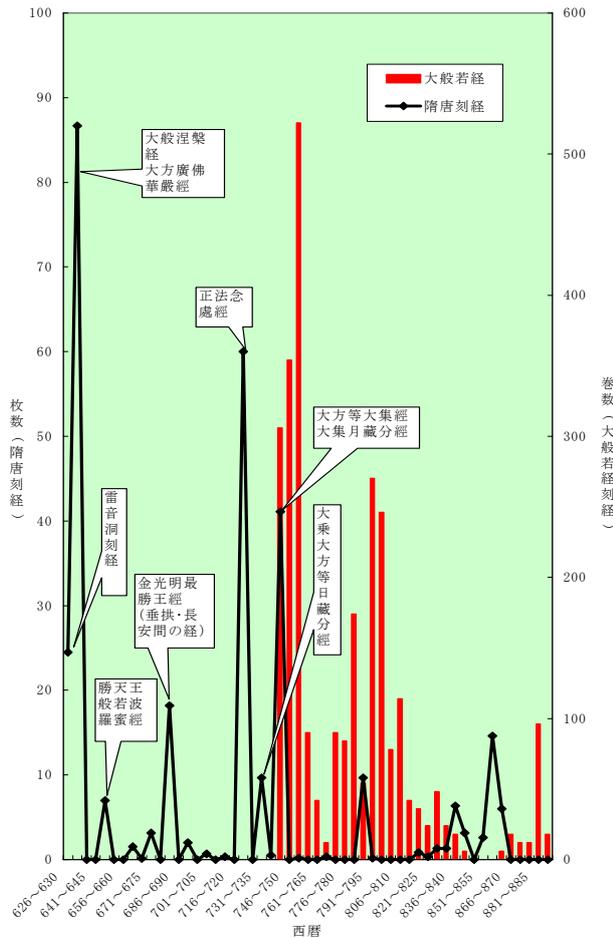
まず雲居寺石経山の9洞の石経状況を表示すると次の「石経山洞窟所蔵石経数一表」のようになる。全4978点(破片含む)、そのうち「大般若経」が1138枚(遼代補充分41を除くと1138枚が唐代制作)からなることが明らかになった。

洞号	経版 石数	洞内 石数	洞外 残石	合計(うち括弧内は 大般若経の石数)
第一洞	972	159		1131(306+遼刻33)
第二洞	1018	73		1091(230)
第三洞	333			333(147+遼刻8)
第四洞	125	39		164(95)
第五洞	146			146
第六洞	200			200
第七洞	283	2		285(118)
第八洞	772	47		819(200)
第九洞	347	43		390
洞外			419	419(1+不明1)
合計	4196	363	419	4978 (1098+遼刻41=1138)

その他、唐代関係の碑刻・石浮図21点以上あり。

次いでこれら石経のうち紀年の明らかなものは大般若経が466枚、それ以外の隋唐刻経が1850巻になることが初めてわかった。それらを一堂に会し、年代に応じてどう変化していくかを図示化したのが次の「隋唐時代刻経年代推移グラフ」となる。これによって

雲居寺による刻経事業が如何に系統的かつ根づよく実施されたことが理解できる。



(2)河北の太行山沿い北よりの曲陽県に黄山八会寺石経が存在する。しかしこの存在は一度、簡単な報告(劉建華「河北曲陽八会寺隋代刻経窟」『文物』1995-5)によって概要が示された以外は具体的な考察はなかった。しかし河北南部の靈泉寺石窟と雲居寺石経の間の、重要な位置を占めると考える。そうした見通しに立って、現地を詳細に調査し、まず刻経状況を詳しく明らかにした。それが右の「黄山八会寺石窟刻経目録」となる。

本研究では刻経すべても所在図を作成の上、文字を起し、写真もつけた資料集を作成した。この石窟は隋開皇十三年(593)の紀年をもち、隋代の事業である。また「過去七仏」「賢劫千仏」などの仏名から、この事業の背後に信行の三階教の影響が読み取れる。とするとその北にある房山石経とどのような関わりになるか。ここに新たな課題が提示されることになった。

(3)山東東部の仏教石刻(主に石仏)を研究メンバーで詳しく調査し、6世紀後半の北齊仏像の特徴とその背景を考察した。その結果、山東東部において、如来立像から見た青州龍興寺を中心とする文化圏の存在と、菩薩立像

### 黄山八会寺石窟刻経目録

経典名	所在
五十三佛名経+現在賢劫千仏名経 1	東壁の北龕 北側+中央
現在賢劫千仏名経(集玉佛より) 2	東壁の北龕、南側
現在賢劫千仏名経(大光明佛より) 3	東壁の南龕、北側
現在賢劫千仏名経(最上佛より) 龕主 題名付き 4	東壁の南龕、中央、 南側
《名前付き二十五佛龕》	東壁龕上
妙法蓮華経之観世音菩薩普門品 1	西龕右側
妙法蓮華経之観世音菩薩普門品 2	西龕中央
妙法蓮華経之観世音菩薩普門品 3 +大般若涅槃経+紀年付き	西龕左側
佛垂般若涅槃略説教戒経 1 + 龕主付き	南龕側
佛垂般若涅槃略説教戒経 2	南龕中央
佛垂般若涅槃略説教戒経 3	南龕側
《過去七佛名あり》	南龕の佛龕
佛説孟蘭盆経?	南壁西の龕外前半部
大方廣佛華嚴経	南壁西の龕外後半部
文字はあるが読解不能	南壁東の龕外
佛説弥勒成佛経 その1	北龕側
佛説弥勒成佛経 その2-1	北龕中央
佛説弥勒成佛経 その2-2	北龕中央
佛説弥勒成佛経 その2-3	北龕中央
佛説弥勒成佛経 その3	北龕側
佛説大方等修多羅王経	北壁東の龕外
《三十五佛名》(決定毘尼経)	東壁龕外

から見た河北(鄴)系仏教文化の当地への広がり(影響)という、二重の構図が描き出せた。また限られた文字資料をそこに重ねると、それら造像活動の背後に山東系貴族(東清河崔氏)が存在したことを指摘できた。

(4)山東西部において各地に大字摩崖刻経が近年注目されている。本研究では、さらに新たに山東兗州市泗水金口壩から収集された同時代(北齊)の仏教石経や造像題記と、鄴附近の水浴寺の刻経や新発見「僧賢墓誌」など新資料を積極的に紹介し、6世紀後半の山東刻経活動の広がりや鄴を中心とした河北仏教界の実体をさらに明らかにした。

(5)6世紀後半に広まる末法思想に、宗教として正面から応えようとしたものに信行の三

階教があった。その護法意識から華北各地に石経を作らせたが、その中で、近年陝西省淳化県に見つかった7世紀後半の金川湾刻経石窟は三階教窟として注目されている。唐の盛時で都長安に近接する場所にあったことをふまえ、三階教系經典の構成と特徴、この地域一帯における三階教徒に存在、信仰・儀礼を通じた実践活動の様相、などをめぐって新見解を提示した。

(6)山西の仏教石刻に関して、現地の主要遺跡を調査し、他には見られない事例で従来研究が進んでいない沁県南涅村出土の仏教石刻の整理と考察を手がけた。時期は北魏から北宋までおよぶが、中心は6世紀の北魏から北斉期で、点数は760余にもなる単体の造像と立方体形の造像石（これを組み合わせると造像塔）。なお仏教史上での位置づけができていないが、その全容・特色を最初に系統的に紹介した。

(7)四川仏教石経は、唐代のものが中心を占め、安岳臥仏溝や灌県靈岩山を始め、各所に存在することがわかっているが、なお系統的調査・研究ができていない。今後の研究をここに及ぼすことを意識して、四川省文物考古研究所と共同で、まず安岳石経の全容の把握に努めた。四川地震で日程変更があったが、幸い被害もなく、基本的な資料状況が把握でき、四川地域史と唐代仏教を考える手掛りが得られた。今後さらに石経の整理公開の方策を検討していきたい。

(8)研究の成果は、最終年度に次のように公開報告会の形で提示し、成果報告書「中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相」にまとめた。

西本照真「南北朝隋唐期の仏教思潮と石経事業—金川湾三階教刻経にみられる独自性と普遍性—」

八木春生「北斉時代の山東地方の仏教造像」

高瀬奈津子「山西省沁県の南涅水仏教石刻とその背景」

氣賀澤保規「河北曲陽の八会寺仏教石経と華北刻経事業」

田熊信之「兗州泗河出土の造像銘断石、刻経残碑と北斉後期の沙門大統」

江川式部「顔勤礼碑所載の人物について」

(9)当科研費を進める母体を明治大学東アジア石刻文物研究所に置き、石刻資料の整理と公開を進めた。その主要成果を列記すると以下ようになる。

①『新版唐代墓誌所在総合目録（増訂版）』の作成：既存墓誌・蓋に追加した数＝1702点、新規追加の唐代墓誌・蓋数＝1919点。その結果、当『増訂版』所載の墓誌・墓誌蓋の総数＝8747点（6828点＋1919点）。

②ホームページの設立と「隋代墓誌目録」検索の情報の公開：

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/index.html>

③新規収集石刻拓本資料の公開展示と解説目録の作成、およびシンポジウム開催。

2006年4—5月「第1回明治大学新収中国石刻貴重拓本展」

2007年2—3月「洞窟に刻まれた末法の石経と聖像—中国河南・宝山靈泉寺の大住聖窟と僧靈裕—展」

2007年3月「第2回明治大学新収中国石刻貴重拓本展」

2008年2—3月「第3回明治大学新収貴重拓本展：唐代の石刻と文人文化」およびシンポジウム「顔真卿と近年発見の石刻資料」、シンポジウム「唐代詩人韋応物と新発見墓誌資料」

④石刻研究をすすめる国内の研究会と連携をとり、2008年7月に2日間「中国石刻合同研究会」を開催し、中国石刻資料を集中的に論議した。報告者は9名。

⑤現在HPから公開を準備中の石刻史料目録：「山西省石刻目録」、「新刊洛陽出土石刻時地記唐代墓誌目録」、「河洛墓刻拾零」、「西安碑林編『隋代墓誌銘彙編附考』目録」、「洛陽師範学院河洛古代石刻芸術館展示目録」など。

⑥『新発見唐代墓誌資料集（写真・録文篇）』を全国の若手研究者の協力を得て刊行（事情により刊行が遅れている。09年7月を予定）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 25 件）

①氣賀澤保規、河北曲陽の八会寺仏教石経と華北刻経事業、中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相、pp.73—125、2009年、査読無

②氣賀澤保規、唐代西州府兵制再論—西州「衛士」の位置づけをめぐって、敦煌・吐魯番文書の新研究、pp.293—313、2009年、査読無

③氣賀澤保規、武則天の感業寺出家問題と徳業寺、紀年西安碑林九百二十周年華誕国際学術研究会論文集（西安碑林博物館）、pp.127—143、2008年、査読無

④氣賀澤保規・梶山智史、河北滹州林旺石窟の調査報告とその歴史的意義、明大アジア史論集、11、pp.14—36、2007年、査読無

⑤氣賀澤保規、則天武后の「感業寺」出家をめぐる一考察、中国石刻資料とその社会—南北朝隋唐期を中心に—、pp.1—34、2007年、査読無

⑥氣賀澤保規、投身於旧中国洛陽墓誌石刻保存の一市井之人的記録—評近刊郭培智・郭培智主編『洛陽出土石刻時地記』、唐研究、12、pp.523—530、2006年、査読有

⑦氣賀澤保規、中国華北の仏教石刻と遺跡の調査報告（2005年9月3日から12日）、駿台史学、130、pp.115—155、2007年、査読有

- ⑧田熊信之、新出土北朝刻字資料瞥見—東魏・北齊期の墓誌、墓磚—、学苑、819、pp.85—94、2009年、査読有
- ⑨田熊信之、兗州泗河出土の造像銘断石・刻経残碑と北齊後期の沙門大統、中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相、pp.165—179、2009年、査読無
- ⑩田熊信之、北魏寇瑊墓誌銘小攷、学苑、807、pp.108—122、2008年、査読有
- ⑪田熊信之、北魏高道悦・李夫人墓誌銘と「父天母地」の語、相川鐵崖教授古稀記念『書學論文集』、pp.216—233、2007年、査読無
- ⑫田熊信之、邯鄲鼓山水浴寺東山石窟の銘文について、学苑、795、pp.86—112、2006年、査読無
- ⑬田熊信之、北魏史小攷—鄭道昭とその一族(二)—、学苑、795、pp.86—112、2006年、査読有
- ⑭西本照真、三階教写本研究の到達点と今後の課題、敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究、pp.391—403、2009年、査読無
- ⑮西本照真、南北朝隋唐期の仏教思潮と石経事業—金川湾三階教刻経にみられる独自性と普遍性—、中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相、pp.38—49、2009年、査読無
- ⑯西本照真、金川湾三階教刻経の歴史空間、相川鐵崖教授古稀記念『書學論文集』、pp.279—286、2007年、査読無
- ⑰八木春生、山東地方における北齊造像に関する一考察、中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相、pp.5—37、2009年、査読無
- ⑱八木春生、青州龍興寺文化圏造像考、芸術研究報、28、pp.9—20、2008年、査読有
- ⑲八木春生、西安北周石造如来立像に関する一考察、泉屋博古館紀要、24、pp.55—77、2008年、査読無
- ⑳八木春生、山東地方における北齊如来立像に関する一考察、仏教芸術、293、pp.55—78、2007年、査読有
- ㉑八木春生、南響堂山石窟に関する一考察、中国考古学、6、pp.21—44、2007年、査読有
- ㉒八木春生、天龍山石窟北齊窟に関する一考察、芸術研究報、27、pp.23—34、2007年、査読有
- ㉓高瀬奈津子、山西省沁県の南涅水仏教石刻とその背景、中国南北朝隋唐期における華北仏教石刻の諸相、pp.180—183、2009年、査読無
- ㉔高瀬奈津子、中国山西省の南涅水石刻について、札幌大学総合論叢、23、pp.213—223、2007年、査読無
- ㉕高瀬奈津子、山東省済南市龍洞石窟の現状、

駿台史学、130、2007年、pp.121—127、査読有

[学会発表] (計 13 件)

- ①氣賀澤保規、河北曲陽の八会寺仏教石経と華北刻経事業、科研費補助金成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」、2009年1月10日、明治大学
- ②氣賀澤保規、倭国的遣隋使和洛陽—紀念小野妹子遣隋使1400周年、遣隋使訪洛1400周年・中日友好条約締結30周年東アジア文化交流国際シンポジウム、2008年10月10月26日、中国・洛陽市
- ③氣賀澤保規、武則天的感業寺出家問題と徳業寺、紀年西安碑林九百二十周年華誕国際学術研討会、2007年10月24日、中国・西安碑林博物館
- ④氣賀澤保規、『隋書』倭国伝と開皇20年(600)遣隋使、遣隋使1400年記念「東アジア史上の遣隋使」シンポ、2007年10月6日、明治大学
- ⑤氣賀澤保規、唐代「房山石経」に刻印された時代の記憶、第29回書論研究会大会、2007年8月19日、大妻女子大学
- ⑥氣賀澤保規、顔真卿関係の最近発見資料の紹介、顔真卿と近年発見の石刻資料シンポジウム、2008年3月13日、明治大学
- ⑦氣賀澤保規、房山雲居寺石経と金仙公主—あわせて唐後半期の刻経事業の展開と唐代社會、中國石刻文獻研究国際ワークショップ、2006年12月11日、京都大学人文科学研究所
- ⑧田熊信之、兗州泗河出土の造像銘断石、刻経残碑と北齊後期の沙門大統、科研費補助金成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」、2009年1月10日、明治大学
- ⑨西本照真、南北朝隋唐期の仏教思潮と石経事業—金川湾三階教刻経にみられる独自性と普遍性—、科研費補助金成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」、2009年1月10日、明治大学
- ⑩八木春生、北齊時代の山東地方の仏教造像、科研費補助金成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」、2009年1月10日、明治大学
- ⑪高瀬奈津子、山西沁県の南涅水仏教石刻とその背景、科研費補助金成果報告会「中国仏教石刻をめぐる諸問題」、2009年1月10日、明治大学
- ⑫高瀬奈津子、『唐李輔光墓誌』から見た河東軍節度使の動向、中国石刻合同研究会、2008年7月27日、明治大学
- ⑬高瀬奈津子、唐文宗期における財政使職の人事の変遷、第57回東北中国学会大会、2008年5月25日、北海道大学

[図書] (計 6 件)

- ①上田秀夫・氣賀澤保規・杉本憲司・鶴間和幸・森達也、東アジアの海とシルクロードの拠点福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化—、海のシルクロードの出発点“福建”展開催実行委員会編、全 199 頁、2008 年、
- ②氣賀澤保規 新版唐代墓誌所在総合目録(増訂版)、科学研究費補助金(基盤研究(B)) 成果報告、全 321 頁
- ③氣賀澤保規、黎虎教授古稀紀念中国古代史論叢(世界知識出版社)の「唐朝長安人口与士兵——唐長安研究序説」、全 766 頁(pp.232-241)、2006 年
- ④西本照真、「華嚴経」を読む、角川学芸出版、全 318 頁、2007 年
- ⑤西本照真・由木義文・蓑輪顕量、新国訳大藏経浄土部 3、大蔵出版、全 232 頁、2007 年
- ⑥西本照真、岡部和雄・田中良昭編『中国仏教研究入門』「三階教」項、全 327 頁(pp.165-178)、2007 年

[産業財産権]

○出願状況(計 0 件)

○取得状況(計 0 件)

[その他]

当科研費研究活動に関わって、次のホームページで情報を発信している。

明治大学東アジア石刻文物研究所：

<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~ishiken/index.html>

中国石刻文物研究会：

<http://sekkokuken.mind.meiji.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

氣賀澤 保規(KEGASAWA YASUNORI)

明治大学・文学部 教授

研究者番号：10100918

### (2) 研究分担者

田熊 信之(TAKUMA NOBUYUKI)

昭和女子大学・人間社会学部 教授

研究者番号：80297043

八木 春生(YAGI HARUO)

筑波大学・人間総合科学研究科 准教授

研究者番号：90261792

西本 照真(NISHIMOTO TERUMA)

武蔵野大学・人間関係学部 教授

研究者番号：50298022

高瀬 奈津子(TAKASE NATUKO)

札幌大学・文化学部 准教授

研究者番号：00382458

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

江川 式部(EGAWA SHIKIBU)

明治大学・商学部 兼任講師

研究者番号：70468825